

さきに愛ありて

第五部 ーふれあう心ー

藤原 審 爾



さきに愛ありて

第五部　－ふれあう心－

藤原審爾

新潮社版

さきに愛ありて

第五部 ふれあう心

昭和五十二年五月十五日 発行
昭和五十二年七月三十日 二刷

定価六五〇円

著者 藤原 密爾ふじ たら しんじ

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号

東京都新宿区矢来町七一六二

電話業務(〇三)二六六一五一一

編集(〇三)二六六一五四一一

振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えます。

目次

うすい夕焼け

五

春の下

四

風の訪れ

九

するどいことば

一〇

遺言

一七

装帧
田
渕
俊
夫

さきに愛ありて

第五部 ふれあう心

うすい夕焼け

十二月はじめ、伊沢は三日間だけ、病院からもどってきた。

「お正月のお客用のぐい呑みをつくるってきかないのよ」

文枝の声には、せつないあきらめが、透明な感じでにじみ出ていた。

その三日間、広いがっしりした家の中にも、仕事場にも、きびしい気配が、凍てつくように籠っていた。

これが伊沢の最後の仕事になるかもしれない。心おきなく仕事をさせてあげたい。とりわけ最後の仕事に、自分のためのものではなく、正月の客たちへの贈物をえらんだ伊沢の心が、若い弟子たちにきびしい感銘をあたえ、葦夫たちをふるい立たせた。

伊沢は、最初の日に、三十個ほど、つぎの日に五十個ばかり、そして三日目に二十あまりつくり、

「家はやっぱりいいな」

と言つて病院へ歸つていった。病院暮しでおだやかになつていた伊沢の顔は、その三日のうちにけわしく疲れくろずみ、どことなく醜くなつてしまった。

そのあくる朝、元気いっぱいいうきうぎした声で、久山が霧子に電話をかけてきた。

「裏山の沢田先生とこが空いたんじゃ。あすこはどうじゃろうな。今日中に返事するいうことにして、抑えとるんじゃが、いっぺん見てもらえんかのう？」

霧子の小学校の教師だった沢田は、学校を停年でやめたあと、その岬の山の借家で独り暮しをしていた。

「だって、わたしが見たつて、しかたがないでしょ。わたしが住むんじゃないし」

「伊勢へ電話したら、霧ちゃんに見てもらえと言うんよ。母さんはわしを信用してくれんけんかう」

受話器をもつた霧子は、明るい笑顔で頷いた。

「わかったわ、これから行つて見てくるわ」

「すまんね」

そういう礼を言つたり、詫びたりする折の久山は、すごく真情を感じさせる。

「じゃ、あとでね」

電話をきると、霧子の耳底に、はずんだ久山の高鳴っている心がのこつており、霧子の心をな

んとくはずましてくる。急いでマフラとコートを身につけ、表へ出ると、表は粉雪が舞っていた。今日は朝起きたとき、肩が冷くなっていたが、雪催いの冷え込みだったのである。門へむかいながら霧子は、ちよつと空を仰いでみた。空には明るさがのこっている。降り積むような雪になりそうもない空模様である。傘の必要なしとみて霧子は、コートの襟を立て、こころもち首をすくめて、急ぎ足になった。

岬の松山のその東の斜面には、以前ほんの二三軒ほどしか家はなかったのだが、五六年まえ山の頂きにホテルが出来、東の斜面に広い路がついてから、ぼつぼつ家がふえはじめている。沢田先生が借りていた松林の中の家は、そのホテルのむこうの路を少し下ったところである。

オルガンの音と子どもたちの元気なうた声が流れ出ている浄雲寺の前を通りすぎ、川ぞいの路から霧子は山道へ入っていった。以前その山道は樹々の間のせまい道だったのだが、いくらか道がひろげられており、道面にタイヤの跡の深い凹凸が出来ている。

その坂道をのぼり、ホテルの横を通り、舗装してある道を下りはじめると、坂下の二つ目のカーブのところに、番傘をさして立っている男の姿がみえた。近頃、番傘はめずらしい。久山ではないかと思ったのだが、思ったとおり久山だった。近づく霧子を仰いで、すぐ小走りに迎えに来た。

「すまんなあ、霧ちゃん」

と番傘をさしだした。

「いいわよ、わたしは」

「ええからええから」

久山は強引に番傘を霧子に渡すと、濃い茶色の毛糸のマフラを、うしろ襟のところからひっぱりあげ、それを頭巾のように頭にかぶって、粉雪の中をもうとつと先に立って歩きだした。むろん誰だってそんなことを好んでするはずがない。

「待って」

霧子はすぐあとを追いかけて、久山と並んで傘をさしかけた。別に霧子は務めてそうしたわけでもなかったのだが、久山はそういう親切が、とても心にしみたように、ふっと涙ぐむような感じになった。それがありあり一つ傘の中の霧子につたわってきた。

ずっと前の久山がまきの許へ通っていた時分、霧子たち三人姉妹は、久山をまきの伴侶として、自分たちの新しい父としてとても認めることが出来なかった。尊敬したり信頼出来るようなところを、久山が持ち合せていないからだ、そうした気持ちがいまだに拭いきれていなくて、それが久山をおびえさせているのだった。

しかし久山が気にしているほど、それは痛烈なものではなくなっており、とりわけ霧子はそうした自分についてや気がさしている。この前、大阪の麻生の新しい家で、月子と言い争ってから、自分の非をはっきり認めるようになっていた。

ちようど夕飯のあとかたづけが終り、子どもたちが寝たあと、まきが湯に入りに出かけ、茶の間には麻生と月子と霧子がのこり、ぼんやりテレビを眺めていた。その時、ぽつりと月子が、久

山のことを、

「あんな男のどこがいいのかしらね、いくら母さんだって、もう少しましな男がいると思うわ」と意地悪い調子で言った。

たでくう虫も好き好きよ、という程度の返事をしておけば、それですむところだったのだが、朝からのしこりが、そのとき霧子の中で、俄かにむくむくつと鎌首をもちあげて来たのだった。

「そんな言い方ないわよ、もう結婚するんだもん。久山さん、なかなかいいところあるもの」

「どこがいのよ、あんな男」

はきだすように月子がまた言って、じろりと霧子を睨むように見た。その月子の目に、別の青白い炎が燃えていた。それが霧子の気持ちをかき乱したのだった。

「そりゃ、お金も地位もないけど、あの人はいい人よ」

お金というところへ、霧子は皮肉こめて言った。それが一層はげしく月子を刺戟し、月子は顔をこわばらせ、けわしくなった。

「ただつきあうだけなら、いい人でいいだろうよ。だけど、自分の夫として、一生暮すのなら、尊敬出来る、信頼出来るところが、いっぱいなくちゃ、駄目なのよ」

「そんなこと言ったら、母さんだって、とりたてて言えるような、いいところはないじゃない。だいいち母さんは、そんながつちりした結婚をのぞんでいるわけじゃないでしょ。母さんは、なにかも思うとおりにならなくて、がんばることに疲れてるのよ。優しくしてくれる人がほしい

のよ。優しく大事にしてもらわないと、生きる気がおこつて来ないのだと思うわ。みんなに必要でない人間と思われても、平気で生きて行けるほどあつかましい人じゃないわ。だいいち、尊敬出来たり、信頼出来る人ということにも、素直について行けないわ。どうかするとそういう解釈や評価には、功利的な計算がつきまとうでしょう。やっぱりいい人というのが、人間の本命なんだと思うのよ。尊敬出来る人というのは、いい人が育つような社会をつくらうとしているから、尊敬出来るんですもの。よい社会をつくるために寄与するのは、社会をふくめて手段なんですよ。目的はいい人をつくることなのよ。まずいい人でなければ、なにがいいのかわかるわけがないわ。だからわたしは、いい人にいちばん期待をもつよ。好人物なんて思う気持ちを、自分に許すまいとつとめてるわ。いい人というのは、人類の理想を体现したかたまりみたいなもので、ああいう人たちの中にあるものを、もつと学ばなくてはならない気がするのよ」

「そんな夢みたいなきことを思ってるから、年中、しみつたれた暮しをしなきゃならないんだよ、あんた達は」

いきなり横にいた麻生が、

「ばっ」

と呶鳴りつけざま、月子の頬を平手でぶった。

それで今度は麻生と月子が口論はじめ、風呂から出てきたまきが、その仲裁をするようなおかしいことになったものだった。

その夜の騒ぎで、霧子は人の好きということに、特別の配慮をするようになっており、久山のそんな気持ちに、よく胸にこたえてくるのだった。

沢田先生がいた家は、山の斜面の横道を、五十米ばかり入ったところの、なだらかな平地の松の林の中にある。いくらか粉雪がつよく降りだした道を、そのまま一つ傘に入って霧子と久山は歩いていった。

「場所が場所だから、家賃も安いし、ホテルが出来た時、ガスも水道も入ったから、不自由はないけえな。店までは、むこう側に径がついとるし、わしはええと思うんじや。一ト稼ぎしたら、買うて、建て直してもええしなあ」

「むこう側に道があるのなら、便利だわねえ」

「ちょっと急な径じゃけえど、中途に、ところどころ石段をつけりやあ、らくになるけえな」

松の林の中のその家は、こぢんまりした平屋だった。どこまでが敷地なのか、仕切りの壁も垣根もなく、松林すべてが庭みたいな感じになっている。多分、沢田が暇々にそうしたのでろう、木々の間に石や草花の花壇などがつくられているし、きれいに刈込んだ灌木の茂みもある。そうしたほんのわずかの、目立たない手入れが、松林を庭のように感じさせるのだった。

格子戸の玄関までくると、久山は先に傘からかけだして、玄関へ近づき、格子戸をあけた。

「部屋は、四つしかないけえど、二人だけじゃもんな。掃除に手がかからんし、手頃なんよ」

久山は、とても気に入っているらしい。

うきうきした腰つきで、さっさと上にあがり、奥へのびている廊下の中で、右の部屋に入った。すぐ雨戸を開ける音がしだし、暗い家の中が次第に明るくなりだした。

突きあたりのところが、台所で、その右側に縁側のある四帖半の茶の間、真中の廊下をはさんで左側に、湯殿と廁、三帖の納戸が並んでいる。右側のほうには、六帖の居間と玄關わきの四帖半がある。四帖半のほうには、掘り炬燵があり、六帖には床の間があった。部屋はこぢんまりしているが、縁が広くとつてあるので、なんとなくゆったりした感じがする。

湯殿もひろかったし、台所も八帖ほどあつて、働き勝手がよさそうである。

ひとまわり家の中をみて歩いてから、居間の縁側へ霧子は出てみた。つめたい縁には硝子戸がはまっており、松林の中に粉雪が降りこんでいるのがみえた。

粉雪の松林のむこうに、雪でかすんだ海もみえた。

「いいじゃない、ほんとに手頃だわ」

ふりむくと久山は、隣りの四帖半の掘り炬燵のところへ腰かけていた。まきと一緒に炬燵にあたっている様子を、ぼんやり想像しているような感じが、その久山の横むきの姿に滲み出ていた。そのうえその感じは、清らかだった。

半月ほど経ってから、また久山から、

「霧ちゃん、伊勢から荷物がついた、見に来てくれんかのう」

という電話がかかってきた。

「いいわ、三十分くらいで行くわ」

霧子は、文枝が病院へ出かけるのを門の外のタクシーまで送ったあと、濃い紫色のジャンパーとジーパンに着替え、すぐ松の林の中のこぢんまりした家へ出かけていった。

この前の雪の朝とちがい、朝から上天気で、松の林の中には明るい冬陽が射しこんでいる。

ホテルへの坂道のところから、まきの荷物は松の林の中の縁先にもう運びこまれていて、久山と店の小村と富永の三人が、陽のあたった縁側で一ト休みしていた。まきのことだから、あれもこれもとありつたけの物を山ほど送ってきたにちがいない。なんとなく霧子はそう思っていたのだが、梱包された荷物はそれほどでもなかった。

「ご苦労さまア」

汗ばんでいきいきした顔になっている若い連中へ声をかけて、霧子が近づいて行くと、久山が縁から立ちあがった。

「すまんね、どこへおいたらええんか、霧ちゃん、決めてくれんか。どうも、さっぱり見当がつかんけえな」

「気をつかうことないんじゃない。来てから好きにさせればいいんだから」

「わしの物も置かにやらんし、いっぺんちゃんと並べてみるとな」

久山は出来るだけのことを、精一杯しなければ気がすまない感じになっており、出刃包丁で梱包の縄やテープを切りはじめた。

小村と富永も、急いで立ちあがり、梱包をとぎだした。

小物は縁側へ一応並べ、箆箆やなんかの大きな物は、梱包だけ解いてそのまま下におき、あとで順番に運びこむことにした。

梱包がほどこかれ、中から品物が出てくるのを見ているうちに、何故、思ったより荷物が少ないのか、そのわけがすぐにわかってきた。まきは、古い物をひとつも送ってきいてなくて、新品を買い揃えているのだった。もしかするとまた伊勢で月子とやりあい、何もこの家の物を持って行きはしないよというようになったのかもしれない。なんといっても月子は、独りぼっちになるのだし、つい焦立って、厭味のひとつも言って、まきをこじらせたかもしれない。

しかしだんだん梱包がとかれ、漸く全部の荷物を一目で見れるようになると、霧子のその想像はおよそあさはかなものだった。

縁先の庭のむしろの上にならべられ、陽をうけて輝いている家具類は、黒塗りの三面鏡と箆箆のほかは、ほとんど男用の物ばかりだった。久山のための物をまきは買って送ってきたのである。あいかわらず母さんは、男につくすのが好きねえ、というような、ちよっぴりもどかしくて、ちよっぴりうらやましい気持ちになった。

小さい家でも、かなりの荷はらくらくとのみこんでしまう。二時間少々でかたづき、それで霧